

博士課程教育リーディングプログラム現地視察報告書(平成26年度)

博士課程教育リーディングプログラム委員会

プログラム名称	霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院	申請大学名	京都大学
申請大学長名	松本 紘		
プログラム責任者	淡路 敏之		
<p>1. 進捗状況概要</p> <ul style="list-style-type: none">・プログラム担当教員同士がよく協力しあいながら、熱意を持ってプログラムを運営している。・京都大学のフィールドワークの伝統を生かして、さまざまな実習を整備しており、国際的に通用するフィールドワーカーの育成が行われていくことが期待される。・他国をリードする新しいタイプの人材の輩出と教育システムの発信が期待され、国内のみならず、国際的にもまさにオンリーワンのプログラムとなると考えられる。・英語を公用語とするセミナー（国際セミナー）や実習を実施し、日本人学生には日本語と英語の2ヶ国語による実習レポートの提出を義務づけるなど、学生が英語を日常的に使う環境がよく整えられている。また、英語で書かれた実習レポートを2段階でチェックするなど、学生の英語力のチェックとフィードバックも適切に行われている。・カリキュラムが密だが、柔軟に組み込まれている点が良い。特に、必修科目である実習を、学生達が専攻の授業等と両立して計画的に履修できるように、毎学期に繰り返して用意されている点は主専攻に付加する形のプログラムとして配慮が行き届いている。 <p>2. 意見（改善を要する点、実施した助言等）</p> <ul style="list-style-type: none">・プログラムの広報に更に力を入れ、より多くの受験生を集めてほしい。・本プログラムの教育システムや成果を、当該領域および隣接領域を専門とする者以外にもわかりやすく示すことができるよう、教育システムの構築、改革の各段階から「明示化」を意識して、プログラムを進めていただきたい。・英語以外の言語の習得について、現在の自学自習中心だけではなく、どうすれば何をどのように学べるのか、より体系だった道筋を示してほしい。特に、CEFR (Common European Framework of Reference for Languages) などを使用して到達点を示し、熟達度テストで学生の力を測定するなど、具体的なプロセスとゴールを明らかにしたうえで、取り組む必要がある。ポートフォリオシステムなどを利用することも一案だと思われる。・「一国まるごとアウトリーチ人材」について、より具体的なイメージや意味するところが依然として不明瞭である。本プログラムの受講学生はもとより、本プログラムに興味を持つ学生や第三者にもよくわかるように、更に詳しい説明を加え、どのような人材がそれに該当するのか、ロールモデルとなる人材の活動や経歴などを明示することも検討されたい。・日本国内のワイルドライフの保全に貢献できる人材の育成について、日本国内の既存の組織や人材との連携を図り、具体的なキャリアパスを示すことなどをとおして更に力を入れてほしい。			